

子宮収縮剤「ウテルゾン錠」の使用経験

昭和37年12月15日 受付

長野県厚生連佐久綜合病院
(院長: 若月俊一博士)

産婦人科部長 山 田 貞 一

信州大学医学部産科婦人科学教室
(主任: 岩井正二教授)

大学院学生 新 井 富 士 夫

Clinical Experience with Utersontablet an Oxytocic
for Oral Administration

Teiichi Yamada

Gynecological Clinic of Saku General Hospital,
Nagano Prefecture

(Director: Dr. S. Wakatsuki)

Fujio Arai

Departments of Obstetrics and Gynecology, Faculty of Medicine
Shinshu University

(Director: Prof. S. Iwai)

〔I〕 緒 言

近年輸血システムの完備, 抗生物質の発達等に伴い, 産科領域における出血, 並びに細菌感染の予後は著しく改善されるに到つた。しかし尚, 収縮不全, 弛緩性出血, 悪露蓄積等はその後患者の経過等に極めて大なる影響を及ぼすものであり, 各種の子宮収縮剤の有する意義は今日も依然として重要である。子宮収縮剤は周知の如く多数の製品が市販され, 注射製剤, 内服製剤として実際にも賞用され, 何れも優秀なる効果が認められている。教室では先に「パルタン錠」に関する成績につき発表した, 更に我々は, 新経口の子宮収縮剤「ウテルゾン錠」(帝國藏器)の提供を受け, 試用する機会を得たので, 以下今日迄の成績につき報告する。

尚「ウテルゾン錠」1錠中の成分は, マレイン酸エリゴメトリン0.05mg, 硫酸スパルテイン50mg, メナジオン(VK₃)0.50mg, カルバゾクロム1.50mg, エトキシベンゾアミド75mg, フェナセチン100.0mgである。

〔II〕 実験材料

佐久綜合病院並びに信州大学産婦人科学教室に入院せる正常分娩後の褥婦57例, 及び妊娠2~3ヶ月で人工妊娠中絶を施行せる17例につき検討した。

〔III〕 臨床成績

(A) 産褥子宮に於る「ウテルゾン錠」の子宮収縮効果

正常分娩せる42名の褥婦を2群に分け, 第1群27名には「ウテルゾン錠」を分娩終了日より1日4錠, 5日間服用させ, 第2群15名には多角流動エキス1日量2.0cc, 同日数投与した。尚, 対照として同期間中に分娩せる無処置の正常分娩婦人より, アットランダム対数表にて15名を抽出し, 第3群とした。以上の様にして子宮収縮状態等を調査すると, 第1~2表の如くで, 第4日目に於ては収縮状態は明らかに有意の差がみられた。

更に之等第1~3群の平均子宮底高の推移情況を図示すれば, 第1図の如くで, 3日以後では明らかに第1群が良好な収縮状態を示している。又1日の平均子宮底高の低下状態に就いても「ウテルゾン錠」例1.7cm, 多角流動エキス例1.5cm, 対照群1.4cmの順位となつている。

又, 使用時の下腹痛も比較的軽度で, 疼痛を訴えた者は27例中3例に過ぎなかつたが, これは錠剤中のエトキシベンゾアミド, 及びフェナセチンの作用によるものと考えられる。

悪露の状態については, 第3表の如く, 特に著明な

第1表 ウテルゾン錠使用例の分娩後子宮収縮状態

番号	年令(才)	経産回数	子宮底高 (cm)			
			1日	2日	3日	4日
1	27	1	11	9	8	7
2	28	1	11	11	10	9
3	29	2	14	13	9	8
4	23	0	15	13	11	10
5	31	3	14	13	12	12
6	26	0	15	13	13	12
7	31	1	13	10	10	9
8	28	1	15	14	13	7
9	28	0	15	15	12	8
10	30	1	10	10	10	10
11	23	0	17	17	17.5	15
12	31	1	12	11	9	7
13	23	0	13	12	11	9
14	41	4	20	17	14	14
15	28	1	17	12	12	12
16	27	1	14	12	10	10
17	26	0	20	15	14	13
18	25	0	12	11	9	6
19	32	1	18	16	9	7
20	25	1	13	12	11	8
21	32	2	14	10	9	8
22	25	0	15	14	11	13
23	25	0	13	12	12.5	12
24	29	0	17	16	17	15
25	25	0	16	15	10	9
26	26	1	15	12	12	11
27	26	0	15	10	9	6

第2表 麦角流動エキス使用例の分娩後子宮収縮状態

番号	年令(才)	経産回数	子宮底高 (cm)			
			1日	2日	3日	4日
1	26	2	13	12	11	10
2	29	1	15	14	11	10
3	25	2	18	12	11	10
4	30	2	17	10	8	11
5	22	1	15	14	13	13
6	36	1	11	10	8	8
7	26	1	16	13	9	8
8	36	2	14	13	12	11
9	30	1	15	14	11	11
10	22	2	14	12	11	9
11	22	1	16	14	13	12
12	34	3	15	12	11	10
13	27	2	14	13	10	9
14	33	3	15	14	11	9
15	36	1	15	15	16	13

第3表 各群の悪露状態

	ウテルゾン 使用群	麦角流動 エキス 使用群	対照群
第1日 色量	赤・中	赤・中	赤・中
第2日 色量	赤・中	赤・中	赤・中
第3日 色量	赤褐・中	赤・中	赤・中
第4日 色量	赤褐・中	赤・中	赤・中

(B) 人工妊娠中絶に於ける「ウテルゾン錠」の子宮収縮効果

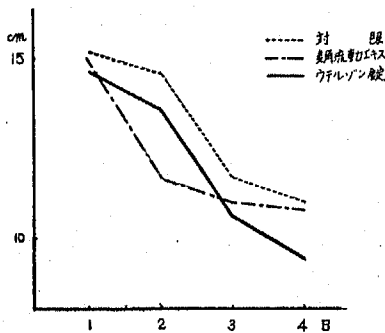
人工妊娠中絶を施行せる17例(妊娠2ヶ月10例, 妊娠3ヶ月7例)につき「ウテルゾン錠」を撮爬実施日の夕食後と翌日朝食後に, 2錠宛服用させ, 下記の藤森氏等の子宮収縮率に基いて効果の観察を行つた。

子宮収縮率 = r , 実施直後の子宮内腔 = a cm, 24時間後の子宮内腔 β cm.

$$r = \frac{a - \beta}{a} \times 100$$

成績は第4表の如くで, 平均子宮収縮率は「ウテルゾン錠」7.4で対照例の平均子宮収縮率4.4との間には推計学的には, 5%の危険率では, 有意の差は認められないが, 「ウテルゾン錠」に於ては, 17例中, 収縮率が5以上が12例と, 比較的良好な成績を示すこと

第1図 各群の平均子宮収縮状態



変化は見られなかつたが, 多少「ウテルゾン錠」に於ては, 悪露の褐色化するの早い様に思われる。

は、充分なる効果を物語るものと考えられる。

第4表 ウテルゾン錠による人工妊娠中絶後の
子宮収縮状態

番号	年令	妊娠月数	α	β	γ
1	29	2	9.0	8.0	11.1
2	30	3	8.0	7.5	6.3
3	26	3	8.0	7.5	6.3
4	42	3	9.0	8.0	11.1
5	35	3	10.0	9.0	10.0
6	38	3	10.0	8.0	20.0
7	35	2	8.0	8.5	-6.3
8	30	2	8.0	7.5	6.3
9	34	2	8.0	7.0	12.3
10	25	2	8.0	7.5	6.3
11	29	2	8.0	7.0	12.3
12	32	2	8.8	7.7	3.8
13	36	2	8.0	7.5	6.2
14	32	3	8.5	8.0	5.9
15	31	3	9.0	8.0	11.0
16	41	2	7.0	7.0	0
17	36	2	10.5	9.5	9.5

平均 $\gamma M = 7.4$

対 照 = 4.4

〔Ⅳ〕考 案

以上の如く、「ウテルゾン錠」の子宮収縮効果についての今日の我々の成績については、先に検討した「バルタン錠」と全く同様の臨床効果が認められた。本剤の臨床成績に関しては既に、保坂、鈴村等の発表があり、かなりの効果が報告されている。即ち、保坂等は、26例につき検討を行い、悪露排泄状況、子宮底長、等対照に比し有意差あり、と述べ、又鈴村等は組織学的検索で本剤使用例では、悪露中に絨毛組織は全く無く、約半数に脱落膜組織を見出すのみと報告している。本剤は、マレイン酸エルゴメトリン、硫酸スバルテインの相乗作用により、それ等の単独経口投与量よりも少量で良好なる子宮収縮状態が得られ、メナジオン(VK₃)、カルバゾクロム、により更に血管強化作用、血管透過性抑制作用も発揮され、止血作用の点でも充分なる効果あるものと思われる。又エトキシベンゾアシド、及びフェナセチンによる相乗鎮痛作用により後陣痛も軽度で、今日の我々の成績でも腹痛を訴えた者は、27例中3例のみであった。又特に副作用は

全く認められず。使用方法も簡単で、産褥子宮復古、人工妊娠中絶後の子宮収縮剤として、充分利用価値ある製品と考えられる。尚投与量は、我々は1日4錠を原則としたが、これは他の製剤の場合と同様、収縮状態の状況に応じて、適宜増減すべきと考えられる。

〔Ⅴ〕結 語

以上経口の新子宮収縮剤「ウテルゾン錠」の試用成績につき報告したが、本剤は投与方法の簡便なこと、その奏効性の優れていること、副作用も少ない事、等の点より、子宮退縮不全、感染予防、等の目的に従来の薬剤と共に充分応用価値ある薬剤と考えられる。

(岩井教授の御指導、御校閲を深謝する)

文 献

- ①藤森・他：産婦世界，11，7：1043，1959 ②保坂・他：第27回関東連合講演要旨，5，1962 ③岩井・他：産と婦，29，7：926，1962 ④河井・他：第26回関東連合講演要旨，8，1962 ⑤小島・他：産と婦，29，7：915，1962 ⑥三谷・他：産と婦，29，7：935，1962 ⑦小野：産と婦，29，7：872，1962 ⑧西島・他：産と婦，29，7：881，1962 ⑨小畑：産と婦，29，1：49，1962 ⑩小川：産と婦，29，7：865，1962 ⑪沢崎・他：第26回関東連合講演要旨，7，1962 ⑫Stoekel：Dhrbuch des Gynaekologie ⑬鈴村・他：第27回関東連合講演要旨，17，1962 ⑭植田：産と婦，29，7：912，1962 ⑮吉野・他：信州医誌，10，1：49，1961